

先日、たぶん「日本で一番不味い」であろう蕎麦をお店で食べました。隣町へ用事で出かけ、たまたま入った『手打ちうどん そば』の看板があげてあるお店です。店構えは老舗を感じる良い雰囲気期待が膨らんだのですが、



私は蕎麦が大好きで毎日食べています。先日も念願であった新潟地方の「へぎ蕎麦」を食べることができて幸せを感じているところです。蕎麦通が遠方から訪れるような専門店の暖簾もたまにくぐりますが、私の場合、街中にひっそり佇んでいて近所の人に愛されているお店や駅蕎麦が好みです。別に手打ちなどこだわりません。外出先で食事をするときはいつも「きつね蕎麦」と決めています。

ちょうどお昼12時に入ったのですが客はいません。少し不安に感じたのですが店内は清潔であり良い趣を感じました。550円のきつね蕎麦と150円の小ライスを注文。厨房で御主人がせわしく動いています。無駄な動きが多

いように思います。案の定、お客私一人なのに20分経過しても出来上がってきません。まもなく登場したきつね蕎麦は一目見て不味そうだと感じました。麺はふにやふにやで切れず、しまい箸でたぐれません。もし河童の水死体というものが存在するのであればそんな表現が適格でしょう。汁はぬるく極端に薄く、ダシの味も香りもありません。村上龍著のタイトル『限りなく透明に近いブルー』が頭に浮かんできました。油揚げは醤油でただ煮ただけというからくて食べることが困難です。

不味い蕎麦

私は、「不味い」と口にすることを好みません。調理してくれた人に失礼だからです。それなのに何故人は「不味い！」と怒るのでしょうか。「俺の一食分を返してくれ！」などと後悔の念に苛まれるのでしょうか。それは中途半端に不味いからだと言わ



ました。

調理法の一部を工夫努力し改良すれば美味しくなる可能性があるからこそ、人はつい感情的にもなるのでしょうか。

「日本一不味い蕎麦」を食べている時は、私はとても穏やかでした。すべての可能性が無となり、喜びを別世界に求め始めていたのです。ここまで



不味いものを食べることは一生に数回しかないことで、今すごい出来事を味わっているというのが私の思いでした。

高校3年生の夏休みに親子丼の底にゴキブリが入っていたことを思い出しました。まるでテレビドラマの一シーンのような出来事が我が身の上におこり、卒業後の自分の将来に希望が持てたのを忘れられません。

私はこのお蕎麦をゆっくり食べ、完食してお店を出ました。
(俊徳丸)